

## 徒然草と沙石集との共通記事の一考察

曹 景 恵

はじめに

沙石集は無住道曉（一二二六—一三二二）の手によって鎌倉時代の中頃の弘安二年（一二七九）の夏に起筆、数年間の中絶の後に再開して同六年の秋に脱稿した全十巻の仏教説話集である。その執筆動機や成立事情については、同書の序及び巻十末の識語に明記されているが、作者無住が自ら序文に、「それ詭言軟語みな第一義に帰し、治生産業しかしながら実相にそむかず。然れば狂言綺語のあだなる戯れを縁として、仏乗の妙なる道を知らしめ、世間浅近の賤きことを譬として、勝義の深き理に入れしめむと思ふ。（後略）」と述べているように、「徒らなる興言」「賤き世の事」など、一見卑俗に見える説話を「道に入る方便」の一つとして書き集め、例話を通して「在家の愚俗」（注一）に仏教の要旨を語り、仏道への精進を勧めるという明白な意図を持つ啓蒙的書物であることは明らかである。もともと比喩、例話を以て法を説くというのは仏法布教の典型的手段であるが、特定の宗派の思想にとらわれず、古今東西にわたる多彩な話題に即しつつ、難解な教理と卑

近な世界をつなげて自在に文章を織りなすところに、他の仏教説話集にはない無住独自の世界が展開する。その沙石集は草稿の段階で早くも都鄙の人々に披露され、「讃敗相半欺」という評価を集めたという（注二）。無住はかかる世評に刺激されて「讃敗相半」という賛否両論の状態から脱するために、晩年まで本文の添削や説話の再編成につとめた。その間に、「讃敗」の度合に変化があったか否かは不明であるが、永仁、嘉元年間京都において沙石集が二度書写されたことは流布本沙石集の識語により確認されており（注三）、鎌倉末期において沙石集は広く読まれ、流布していたものと想像される。

前述したように、沙石集は兼好の生年と推定される弘安六年（一二八三）頃に成立し、徒然草に先行する書物である。沙石集と徒然草との関係については、早く黒田亮氏（注四）が両書の間に共通記事がいくつか存することを注意され、三木紀人氏（注五）は、東国出身の無住と、関東に深い由縁があつて知人も多い兼好との間にあつた共通の地縁を考慮するならば、兼好が沙石集に対して

全く無縁であつたとは考え難いとされている。また、西尾光一氏（注六）は文体・表現の手法・自己を省察する発想の諸点において、徒然草は沙石集に負う部分が少なくない指摘されている。実際、沙石集と徒然草とを丹念に読み較べるならば、両者の類縁の多さは容易に気付かれる。本稿では先行研究を踏まえつつ、両書の間に共通・関連記事が認められる徒然草四十九段、五十八段、七十五段などの章段を取り上げ、徒然草と沙石集との関わり、及び思想上の異同についてあらためて考察を行い、両書の相関性を明らかにしてみたい。

—

徒然草四十九段は無常の自覚とそれにねざす発心をすすめる説示的内容の章段である。沙石集との関連記事が二箇所ほど見出される。冒頭の「老来て、始て道を行ぜむと待ことなかれ。古き塚は多くこれ少年の人なり」という一文はいち早く修行・発心を勧める格言であるが、その出典として「寿命院抄」が「寒山頌」を掲げるものの、現存する文献には同一の文言を見出すことができない。【基槌】は明の李卓吾編「浄土決」にある「古人句曰。莫待老来方学道、古墳盡是少年人」という文言を引くが、これは兼好より時代が下るものである。一方で、前引した四十九段の冒頭文とは同一の言が、梵舜本沙石集卷五本の十一「学生ノ歌好ミタル事」及び「帰元直指集」に「古人曰」という形で見出される

ことが、近代の徒然草研究において指摘されている（注七）。梵舜本沙石集卷五本の十一「学生ノ歌好ミタル事」には、恵心僧都の語や縁上人の歌を引いて仏道修行を怠るなど説いた後、「サレバ、若クサカリニツヨク、病ナカラム時ツトメラ、コナフベシ。老ヲ待ツ事ナカレ。古人云、「老来リテ、初メテ道ヲ学セント云事ナカレ。古墳ヲホクハ是少年ノ人ナリ」ト。老少不定ノ国ナレバ、若シトテモ、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>馮。衆苦充滿ノ境ナレバ、富リトモ安穩ナルベシト思事ナカレ。フルキ墓をトブラ（へ）バ、ヲ、クハ、ワカシテ世ヲハヤウセル人ナリト云ヘリ」と述べている。同じ箇所が米沢本沙石集卷五本の十四「和歌の徳、甚深なる事」では、「されば、若く盛りにして強く、病なからむ時、勤め行ふべし。老を待つ事勿れ。古墳多くはこれ少年の人なり」と。老少不定の国なれば、若しとて頼むべからず。古き墳を訪へば、多くは若くして、世を早くせる人なりといへり」となっているが、「古人云」の句を欠き、「老来リテ、初メテ道ヲ学セント云事ナカレ」という語句が略されているものの、梵舜本の内容とはほぼ一致している。米沢本沙石集卷五本の十四「和歌の徳、甚深なる事」は「和歌の徳」は「仏の詞に異なるべからず」、「陀羅尼と一つに心を得べし」といわれる「和歌即陀羅尼」という思想を語る内容であるが、前半にはある上人の和歌を引いて「この歌は遺教経の心に相叶へり」とし、「文の意は仏の教え置き給へる御法、なす事無くして明け暮れなば、既に死門に及ばむ時、悔やしむべし。或いは病に

臥しぬれば、身のつつがなりし時、勤めざる事を悔ひ、また年老ひ、力弱くなりぬれば、若かりし時勤めざる事を悔ひ、命終るとき、悪相現じて、苦痛にせめらるる時は、設ひ老・病ありとも、命のありける時、など一善をもなさざりけん、と悔やしかるべし」と、若く身体が盛りで強く、病氣にかかつていない時、仏道修行に精励すべきことを勧進し、徒然草四十九段前半の内容ともよく合致している。

いずれにしても、梵舜本沙石集では「古人云」とするだけで、その典拠を明示していない。『全注釈』では「兼好はあるいは、『沙石集』のこの個所によつて書いたかもしれない」としつつ、『帰元直指集』の「行脚求師開示序」に「古人云、莫待老来方学道、孤墳盡是少年人」という一文が見出されることを指摘し、無住や兼好は同書に「接することも可能であつた」と説いている。一方、福田秀一氏は、梵舜本沙石集に「古人云」として記された二句は、徒然草の記事とは若干字句に相違は見られるものの、出所は同じと見て誤りないであろうと述べ、「兼好・無住の一方もしくは両方が、出典など意識せずに、一種の諺として引用しているのではあるまいか」と説かれている。

安良岡康作氏が、無住や兼好が『帰元直指集』に接した可能性もあつた、と推定されるその理由は、同書が宋の元符二年（一〇九九年）に没した円照宗本（雲門宗）の著作であるとするところにある。ところが、荒木見悟氏の解題によると、『帰元直指集』

の作者は一元宗本（天台宗）という明の嘉靖から隆慶年間にかけて活躍した、詳伝不明の僧侶であることが確認されており、『帰元直指集』は明代の書物であることが今日通説になっているようである（注八）。『帰元直指集』は明に成立した著作であるならば、沙石集や徒然草より後にできたものとなり、それを徒然草や沙石集の出典として視ることはできない。他方、『帰元直指集』に「古人云」として引用される、「莫待老来方学道、孤墳盡是少年人」という文言は、無住や兼好の生存時代とは異なる、または先立つ、南宋末期に成立したと推定される『銷釋金剛經科儀』にも見出される。『銷釋金剛經科儀』は鳩摩羅什が譯した『金剛般若波羅蜜經』（以下は『金剛經』と略称する）の内容を分かりやすく説明した、宝巻形式の仏書で、『銷釋金剛科儀』『金剛科儀』『金剛科』『金剛宝巻』とも呼ばれている。宝巻とは変文に由来するもので、中国の説唱文学の一種である。唐の末期に俗講と呼ばれる対俗教化のための講唱形式の説法が盛んに行われており、その際に用いる講唱文を「変文」と呼ぶ。宋真宗の頃、変文が禁止させられ、それ以後は説經、説參詣などの講唱ものの談經系芸能が流行していたが、これは明清に入つて宝巻と呼ばれるものの先駆であると考えられている（注九）。また、澤田瑞穂氏は、宝巻の出現を変文の系譜だけから規定するよりも、むしろ科儀書、壇儀書、懺法書からの転化をも重視する必要があると指摘している（注十）。宝巻は散文による講説の部分、詞調名をもつ曲詞の部分、

及び五字・七字・十字の韻文部分という、三種の文体が交互に組み合わさっている構成からなるものである。その内容は仏教や道教の教義を説いたもの、主人公の修行と成仏の因縁を語るもの、各種民間宗派の布教用のもの、小説や民間伝承などの物語を題材にしたものなどがあるが、初期においては体裁・内容ともに仏書の一種と見るべきものとされている。『銷釋金剛經科儀』（以下は「金剛科儀」と略称する）の成立年代や著者については不明な点が多いものの、吉岡義豊氏は、著者「隆興府百福院宗鏡禪師」とは五代の高僧永明延壽ではなく、恐らく南宋末期の人物で、当該書物は南宋理宗淳祐年間（一二四一―一二五二）の成書であることを推定し、現存宝巻の中できわめて格調の高い傑作であるという評を下している（注十一）。書名に「科儀」という語がつけてあるところから、「金剛科儀」は主に、法会や壇儀の際に唱誦されるものであることが分かるが、同書に横溢するのは淨土思想と無常觀の強調で、「未明人。妄分三教。了得底。同悟一心。若能返照迴光。皆得見性成佛」という文言が示すように、三教同源、禪淨一致の思想をも唱えている（注十二）。「非エリート階層」（注十三）の聴衆を魅了し引き入れるために、「金剛經」の經文講説に入る前に、同書の冒頭には相当長文にわたって、弥陀如来・釈迦如来の讃、發願文や「金剛經」の由来や御利益などを唱える文段が設けられている。そこには、

「此經佛說數千年。無量人天得受傳。

憶得古人曾解道。更須會取未聞前。  
人間陽壽真難得。一寸光陰一寸金。

莫待老來方學道。孤墳盡是少年人。

在家菩薩智非常。鬧市叢中作道場。

心地若能無罣礙。高山平地總西方。

金剛般若體如如。翠竹黃華滿路途。

八百餘家呈妙手。大家依樣畫葫蘆。」（注十四）

という詩句が見出される。

また、若干表現上の相違が見られるものの、「金剛科儀」の成立前後の書物では、前引文の傍線部と似通っている文言が、以下のように見出される。

「莫待老來方學道。要知忙裏好偷閑。」〔樂邦遺稿〕（南宋）

卷下（注十五）

「莫向老來方學道。孤墳多是少年人。」〔林泉老人評唱丹籙淳禪師頌古虛堂集〕（元）卷六第八十八則梁山日用（對機）（注十六）

「死心禪師道。世間之人財寶如山。妻妾滿前。日夜歡樂。他豈不要長生在世。爭奈前程有限暗裏相催。符到牽行不容住滯。閻羅老子不順人情。無常鬼王有何面目。且據諸人眼裏親見耳裏親聞。前街後巷。親憎眷屬。朋友兄弟。強壯後生。死卻多少。世人多云待老來方念佛。好教爾知。黃泉路上無老少。能有幾人待得老。到少年夭死者多矣。古人云。莫待老來方念

佛。孤墳多是少年人。」「淨土或問」(元) 卷一(注十七)

右に示されるように、「樂邦遺稿」では「莫待老來方學道」の一句のみ記され、「虛堂集」では誤字か誤植のため、「莫向老來方學道」となっている。「淨土或問」では「學道」ではなく、「念佛」とあるが、文意が大して変わらない。なお、死心悟新は北宋(仁宗慶暦三年(徽宗政和五年))の人物で、「死心悟新禪師語錄」を著したが、この語録には「淨土或問」に引用された、「世間之人財寶如山」云々との文言が見当たらず、「古人」も誰のことか明らかでない。

以上の資料に限ってみれば、出典を限定するのがやや難しいところではあるが、宋から元にかけていくつかの仏書に極めて類似する表現が見出されること、また、「金剛科儀」そのものが対俗教化のための講説用テキストで、いわば「金剛經」の注釈書のような存在であるという書物自らの性質などを踏まえて考えてみるならば、「莫待老來方學道。孤墳盡是少年人」という文言は恐らく、遅くとも南宋までにすでにある程度中国に広く受容され、流行っていた語であることが十分に考えられるのであろう。また、「淨土或問」の前引文とはほぼ同様な文言は、「帰元直指集」「行脚求師開示序」や「淨土決」をはじめとする、明以降の浄土信仰関係の仏書にしばしば引用されている事実(注十八)からみて、はじめは禅や浄土関係の書物によく取り入れられ、説法に用いられていたが、時代が下るにつれて、当該文言は主に浄土宗に好まれて撰

取されていたものであることが明らかであろう。

四十九段の「老來て、始て道を行ぜむと待ことなかれ。古き塚は多くこれ少年の人なり」という冒頭の一文は明らかに漢籍か仏典等の章句を読み下したものと考えられるが、その原典となるものは依然として不明である。しかし、前述した、中国における「莫待老來方學道。孤墳盡是少年人」という文言の受容・流布状況を視野に入れつつ、あらためて考慮するならば、当該文言は禅学とともに日本にいち早く將來したと思量されてよいのであつて(注十九)、福田氏が言われるように、当該文言は鎌倉時代には仏者の間で膾炙していて、兼好が一種の諺としてその文句を引用したという可能性も大いにあるのである。

また、梵舜本沙石集・徒然草ともに「語序としてやや不自然なところが見られるのも、耳で記憶したところを文字に記したために」発生したとする福田氏の見方もありうるであらう。ところが、梵舜本沙石集の記事と徒然草四十九段の冒頭文とをよく比較してみると、両者に若干の語詞の違いがある。すなわち、梵舜本沙石集の「道ヲ学セント云事ナカレ」とする部分が、徒然草では「道を行ぜむと待ことなかれ」として記されており、厳密に考えてみるならば、語序として不自然なのは徒然草のみではないかと思われる。梵舜本沙石集の記事を漢文に書き直してみると、「老來莫云初學道」となり、漢文としてやや瑕瑜があり、美文とはいえないものの、文意がまったく通らないわけではない。一方、徒然草



四十九段の冒頭文を漢文に書き換えると、「老來莫待始行道」となり、漢文としては成立しがたい。仏典や漢籍などに典拠が求められるにもかかわらず、不自然な語序に拘泥せずに、兼好が、「老來て、始て道を行ぜむと待ことなかれ」と書き記したその背景には、恐らく中国でしばしば講唱されてきた「莫待老來方學道。狐墳盡是少年人」という文言が日本においても広く享受され、諺として相当流行っていたことが想像されてよいのであろう。なお、梵舜本の小疵を補綴するかのうちに、当該文言は、内閣本沙石集では「古人云、莫<sup>テ</sup>道老來<sup>テ</sup>」(初)学<sup>ト</sup>道。古墳多<sup>ハ</sup>是少年ノ人<sup>ノ</sup>。」、古活字本沙石集では「古人云莫道老來初學道古墳多是少年人ナリト」と漢文で記されている。また、米沢本・元応本沙石集ではともに、「老を待つ事なかれ。古墳多くはこれ少年の人なり」の如く略記されているのは偶然ではないにも思われる。無住は恐らく、一種の諺として仏者の間で膾炙していた詩句に言葉綴りの瑕疵があることを意識していたのであり、その故に、「古人云」としてそれを引用するのを回避していた可能性も考えられなくはないであろう。梵舜本・内閣本・古活字本の当該記事は、最晩年まで無住自らの改稿か、後人が書き写すその度に添削の手を加えていた結果とみてよいのであろう。

## 二

徒然草四十九段には先述したように、冒頭部の前引文以外にも、

沙石集との共通記事を認めることができる叙述を見出し得る。命終に際してはじめて過去の修行の怠慢を後悔しても仕方がないという冒頭の文章を受けて、次の段落では無常の自覚こそ仏道精進の原動力であると述べ、命終の際に後悔をしないように、いち早く仏道修行を始めることを勧めるが、「速やかにすべきことを緩くし、緩くすべきことを急ぎて、過ぎにしことのくやしきなり」という一文とかなり類似する表現が、「拾遺抄」が指摘した通り、沙石集巻六の七「説経師の盜賊に値へる事」に以下の如く見出されるのである。

嘉祥大師、同法の僧の、学問をのみ宗として、修行の疎かなるを戒めて云はく、「百年の命、朝露に緩からず。須く道の急を存すべし。緩くすべき所を急にすべし。急にすべき所を緩くす。豈、一生自ら誤まれるに非ざらん耶」。文の意は、学は行の爲なり、緩かるべし。行は出離の要なり、急にすべしと戒むるなり。

当該説話では、「百年の命、朝露に緩からず。須く道の急を存すべし。緩くすべき所を急にすべし。急にすべき所を緩くす。豈、一生自ら誤まれるに非ざらん耶」という嘉祥大師の言を引き、学問より「行」、つまり仏道の実践の重要性を語っているが、その文意と言辭は、仏道の修行を勧める徒然草四十九段の趣旨及び「速やかにすべきことを緩くし、緩くすべきことを急ぎて云々」という叙述とよく似通っている。

四十九段は兼好の仏道精進の覚悟を直示する章段として徒然草中に初の位置を占めるが、沙石集との関連を二箇所ほど見出されることは単なる偶然ではないように思われる。巻六の七「説経師の盗賊に値へる事」は盗賊に会った説経師や玄奘三蔵などの説話を例に引き、現世は電光朝露のようなはかないものですぐに「発心して」「道行を急ぐべし」ということを唱える一話であるが、

無常の自覚の上に発心を勧進する本話の主旨は、無常迅速の現世ゆえに万事を捨てて仏道修行の道に就くべきことを力説する徒然草四十九段の内容とよく一致している。上引した嘉祥大師の文言について、新編日本古典文学全集「沙石集」の頭注では出典未詳とするが、当該記事と四十九段の前引文とは叙事のし方がよく似通っており、文の趣旨まで一致することを念頭に置いて考慮するならば、四十九段の「速やかにすべきことを緩くし、緩くすべきことを急ぎ、過ぎにしことのくやしきなり」という叙述は、沙石集に引用された嘉祥大師の言辭を踏まえて発想されたものと考えられてよいと思われる。また、嘉祥大師の説示を引いた後に「文の意は」として、「学」よりも「行」を「急にすべし」ことの重要性を唱える無住自らの解説と、徒然草四十九段冒頭文との関連性も無視はできないであろう。仏者の間で一種の諺として膾炙していたかと思われる、「莫待老來方學道」という文言を、兼好は肝心の勸詞の部分を書き換え、仏道を受動的に「学」おではなく、能動的に「行」うものであると強調する。その叙述には、無常の

世に対していち早く仏道を実行せよという兼好の仏道精進の覚悟がよく示されているのみならず、沙石集巻六の七に述べられる、嘉祥大師の上引文に対しての無住の釈文から示唆を得ての所為であった可能性も十分に考えられると思われるのである。

以上に検討してきた如く、徒然草四十九段には沙石集との関連記事が二箇所認められ、両書は仏道勧進という主題において共通していること、また兼好と無住とはともに同じ時代を生きて共通の地縁を有していたこと（注二十）などの事柄を併せて考えてみると、兼好は自身の経験や心証に基づいて四十九段に無常の自覚、仏道の精進を唱えたのであろうが、自己の論理を強化するために啓蒙的仏教説話集として当時流布していた沙石集に引かれた文言を借用し、しかも沙石集と同様のモチーフのもとでごく自然にそれを自らの文章の中に組み入れていると理解されてよいであろう。

### 三

五十八段は仏道修行の衣食住の生活面を問題にして現実的な論を展開しているが、「心は縁に引かれて移る物なれば、閑かならでは、道は行じがたし」と述べるように、「閑居」の必要性を力説している。本段の「何の興ありてか、朝夕君に仕へ、家を顧みる営みのいさましまらむ」という叙述が、沙石集巻三の一「癡狂人が利口の事」に見出される勝軍禪師の「人の様を愛すれば人の

事を憂ふ。生死の身に纏繋せるを断たんと思ふいそぎあり。何の  
いとまありてか君に仕まつらむ」という発言とかなり近似してい  
ることはすでに近代の徒然草注釈書に注意され、「諸注集成」は「あ  
るいは、この説話を兼好も知っていたのではあるまいか」と推測  
している（注二十一）。同段の末尾において「菩提に赴かざるは、  
よろづ畜類には変る所あるまじくや」とのように、人に生まれて  
仏道の修行をせずにいるのは「畜類」と変わらないことを説く兼  
好の峻厳な口吻と、沙石集巻六の七「説経師の盜賊に値へる事」  
に引かれる「六根を具し、智慧さかしくとも、仏道を行ぜずして、  
偏へに今生の如く安楽ならんと思はば、畜類に異らず」という竜  
樹の戒めとは、その趣旨なり叙述なりよく一致しているのも自明  
である（注二十二）。また、本段の前半において兼好は、求道心  
さえあれば住む場所は関係しないという安易な考え方に批判を呈  
するが、稲田利徳氏は沙石集巻十本の「浄土房遁世の事」の「是  
程の遁世はかたくとも、志誠あらば、身は家を出ず、形は世に随  
ふとも、誠の信心深くして、穢土を厭ふ心も深く、浄土を願ふ思  
ひも切ならば、往生の頼みもあるべし」という記事を引きつつ、  
外見上は世俗の事に従つても、信心が深ければ往生できるだろう  
という安易な遁世を考えた人は、当時にあつては「相当数存在し  
ていたであろう」と述べられている（注二十三）。

徒然草七十五段は閑かな生活を送ることの勧めを説く、閑寂を  
志向する兼好の心境がもつとも顕著に窺える章段である。冒頭に

「つれづれ」を苦にする俗人否定して、「まぎる、方なく、たゞ  
ひとりある」境地を積極的に肯定し、本段の主旨を明らかにして  
いる。章段の末尾において「摩訶止観」の文言を借用しつつ、「ま  
ことの道を知ら」ざる世間の人に對して、「身を閑かにし」「心を  
安く」することこそが「しばらく楽しむ」ことであると説き、世  
間の俗事に煩わされないで閑居することの意義を再強調する。安  
良岡康作氏は末尾の記事について、「止観」の説く所を祖述した  
ものではなく、自己の述懐を主として、それを根拠づけるために  
引用している」と述べつつ、沙石集巻六の七「説経師の盜賊に値  
へる事」の記事内容との類似性にも注目され、「あるいは当該の  
箇所等が兼好をして『止観』に関心を持たせるに至ったのかもし  
れない」と推測されている（注二十四）。また、「いまだまことの  
道を知らずとも、縁を離れて、身を閑かにし、事に与らずして、  
心を安くせむこそ、しばらく楽しむとも言ひつべけれ」という記  
述についても、安良岡氏は、流布本沙石集巻四の七「道人可捨執  
着事」に見出される「サレハ古ノ賢人世ニツカヘスシテ心ヲヤス  
クシ、オノレカ道ヲヤシナフ」や「身シツカニ心ヤスクシテ、修  
行ノ功ヲツマンハカリ、人身ノ思出アラシカシ」などの叙述を参  
考に掲げられている。

遁世を勧め、仏道修行における在所の寂靜の必要性を述べる徒  
然草第五十八段と、縁務から離れ「身を閑かに」「心を安く」す  
ることこそが安楽であると説く第七十五段は、両段とも「身心の



安静境「生活の閑暇境」を主題とする章段であるが、如上の諸注釈書が指摘した通り、沙石集との関連は様々な形で見出されるのである。先行研究の指摘に加えて本稿では、沙石集巻四の七「道に入りては執着を棄つべき事」、巻九の二十五「先世坊の事」、巻十本の四「俗士、遁世したりし事」の三話に、兼好が徒然草五十八段及び七十五段において勧奨する「心身の閑寂境」と類似する記述が見出されることに注目したい。

沙石集巻四の七「道に入りては執着を棄つべき事」との関連が留意される記事を、徒然草九十八段の権汰瓶の条と、百四十二段の「世を捨てたる人のするすみなるが」の条の二箇所に見出し得ることは、早く『壽命院抄』以来の徒然草諸注釈書に指摘されている。沙石集の当該説話は冒頭に法然と春乗房との会話を記しているが、「秦太瓶一つなりとも、執心とどまらん物は棄つべしとこそ、心得て侍れ」という春乗房の発言が「一言芳談」に収録されており、徒然草九十八段にも記されている。後半部には「匹如身後有何事。応向人間無所求」という白楽天の詞を引用しつつ、「身を捨てやりぬれば、求むる所も少なく、煩ひもなく、欲もなく、心安し」という道理を心得るならば「摩訶止観」を全部理解したとする明禪法印の「止観」談義を記す。従来の徒然草注釈書が当該説話に現われる「するすみ」という詞と百四十二段の「世を捨てたる人のするすみなるが」という叙述との類似を指摘してきたが、本稿では同話の「止観」談義の後に無住が、

実に、事少なければ心安く、情忘れぬれば煩ひうすき事に、身一つはなにとなく養ひ安く過ぎやすし。人の世にありて、富貴にほこり、栄花を愛するを見るに、苦を以て楽とし、煩ひを以て榮と思へり。身大くなれば事しげく、煩ひ多し。人の煩ひを請け取りて、上に仕へ下を顧み、静かならざるを以て榮と思へり。身も安く心ものどかなるを、楽とも知らざるなり。楽天の曰く、「富貴にして亦苦有り、苦は心の危憂に在り、貧賤にしても亦楽有り。楽は身の自由に在り」と云へり。

実に心も苦しく身も危くば、何の楽もよしなし。林下の貧道の風月に嘯き、法味を嘗ひて一生を送り、解脱を期し、世上を幻の如く思ひ、身心を夢の如く思へるは、当時も身も安く、後生も憑あらん。賢首の曰く、「真楽は本より有るを、失なひて而も知らず、妄苦は本より空なるを、得て而も覺らず」と。

光明皇后の御筆に、内裡の屏風に書き給へるとかや、「清貧は常に樂、濁福は常に憂ふ」と云へり。（中略）榮枯事過ぎぬれば、皆夢の如し。憂喜心に忘れて、空門を学ぶべきなり。

と述べているところに注目し、徒然草七十五段に見られる「心身の閑静」を重視する兼好の思考との同質性について考えてみたい。新編日本古典文学全集『沙石集』の頭注では、前掲した白楽天の詩句は、沙石集巻十本や『聖財集』『雜誌集』などでも繰り返して引用されるもので、無住自身の思想の根幹にあつた考え方を表すものと注している（注二十五）が、「事少なければ心安く、情

忘れぬれば煩ひうすき事にて、身一つはなにとなく養ひ安く過ぎやすし」と説き、物事に煩わされず身一つで過ごすことをよしとする無住の考え方は、徒然草七十五段の「つれ／＼わぶる人はいかなる心ならむ。まぎるゝ方なく、たゞひとりあるのみぞよき」という冒頭文の趣旨と通ずる部分が少なくない。また、「人の煩ひを請け取りて、上に仕へ下を顧み、静かならざるを以て榮と思へり。身も安く心もどかなるを、榮とも知らざるなり」の如く、「身も安く心もどかなる」という状態を「楽」と捉える無住の思想と、「いまだまことの道を知らずとも、縁を離れて、身を閑かにし、事に与らずして、心を安くせむこそ、しばらく樂しむとも言ひつべけれ」と述べて、「縁を離れて、身を閑かにし、事に与らずして、心を安くせむ」ことに生の充足を見出す兼好のものの考え方の間には相応の近似を認め得るであろう。当該説話の末尾に無住は賢首の詞や光明皇后の筆による成句を引用し、人生の榮枯盛衰がすべて夢のようであつて、憂いも喜びも忘れて、空門を学ぶべしという結論を出す。賢首の「真楽は本より有るを、失なひて而も知らず、妄苦は本より空なるを、得て而も覺らず」という文言の典拠は未詳であるが、「真楽は本より有るを、失なひて而も知らず」の一文と七十五段末尾の「いまだまことの道を知らずとも、縁を離れて、身を閑かにし、事に与らずして、心を安くせむこそ、しばらく樂しむとも言ひつべけれ」という叙述との思想上の相関性に留意されたい。賢首がいう「真楽」とは恐らく

仏道における悟り、菩提の境地（注二一六）であらうかと思われるが、徒然草七十五段では「まことの道」が理解できず、かかる「真の悟り」「真の楽」に到達できない世俗の人に、身心の安楽を保てば「しばらく」の間でも「楽」しむことができると説いている。「真楽」の境地を求め、もっぱら仏道修行の道に入ること勧める無住とちがって、兼好はあくまで現世における「心身の閑寂」を重視するのである。

名利、榮華、恩愛などに束縛されず自由な身でいるのを「楽」とする無住の思想は、沙石集巻九の二十五「先世坊の事」と巻十本の四「俗士、遁世したりし事」にも窺い見ることができ。巻九の二十五「先世坊の事」の前半部では先世房や漢朝北叟の故事、老子の詞を以て物事には必ず損得両面があるとの道理を述べ、「人の習ひ、得を愛して失を憎みて、得を弁へざるは返々も愚かなり」とする。無住は得失の境を超越できない世俗の人がよき「牛馬六畜、資財雜具等」を喜ぶが、「富貴なるは失多し」、「貴き時は憂ふる事多し」、財物より身心の安楽を優先すべきことを説く。そこに、

実に富貴なれば身苦しみ、危ふくして、常に足らず、竜の頭多ければ、苦しみの多きがごとし。財多く、禄多ければ、身苦しき事なり。（中略）

されば、財は身のためなり。身は心を主とす。財多くとも、身失すべくは由なし。身樂しくとも、心苦しくは何かせん。た

だ心を安くし、身を自由なる、これ今生も楽しむなり。身心共に安きを便として、仏法の修行も思ひ染むべし。

貧を安くし、罪少なく、心安く、身閑にして、仏法を行ぜむばかり、人身の思ひ出あらじかし。

寒山子の云はく、「千金の宝を満つと云ふとも、林下の貧にはしかじ」。古人の云はく、「道を学せんと欲せば貧を学ぶべし」。(中略)「六根全く具し、智慧明利なりとも、善事をば修せずは、徒らに人身を受けたるなり。禽獣も五欲の樂を受くしかも方便して、善を修せず。人身を受けながら、道行を修ぜずは、禽獣に何ぞ異ならん」と云へり。(中略)

国に仕へ、家を持つは、身も心も苦し。されば、勝軍論師は、国の師となさるべかりしを辭し申し、詞に云はく、「人の禄を受けぬれば、人の事を憂ふ。生死纏繋を断たんと思ふいそぎあり。何の暇ありてか、君に仕へん」と云へり。誠なるかなや、この詞。

という記事が存する。無住は「心を安くし、身を自由なる」ことを「今生も楽しむ」としつつも、さらに心身の安樂を縁として仏道修行に赴くことを勧めている。また、卷十本の四「俗士、遁世したりし事」には、

身貧しくとも、心安くは樂なるべし。(中略)

身も暇なく、心も隙なければ、仏法修行の志も立ち難くして、浄土菩提の淨業も成しがたし。今生後生の楽しみ無きは、ただ

身大きに世にある人なり。賢逵の門に入りて、僅かに樂を防ぎ、飢ゑを休めて、心安く身自在にして、一生を送らんと思ふ、まめやかに賢き心なり。(中略)

されば、心の安く、思ふ事なき程の楽しみはなし。ただこの世に心安きのみにあらず、罪無く妄念なくして、仏道に修行せば、当来頼もし。

という論述を見出すことができる。「身貧しくとも、心安くは樂なるべし」、「賢逵の門に入りて、僅かに樂を防ぎ、飢ゑを休めて、心安く身自在にして、一生を送らんと思ふ、まめやかに賢き心なり」と、遁世してすべての縁務をやめ、心身ともに安樂の状態で過すことを讃揚する無住の考え方は、心身の閑静と遁世の勸進を旨とする先述した五十八段及び七十五段の二つの章段のみならず、徒然草第百二十三段の「人間の大事、この三には過ぎず。飢ゑ、寒からず、雨風に侵されずして閑かに過すを樂しむ」という一節や、三十八段冒頭の「名利に使はれて、閑かなる暇なく、一生を苦しむるこそ、愚かなれ」という一文にもよく通ずる部分が少なくないように思われる。しかしながら、その一方で、世俗の雑事から「身」「心」の解放された状態を「樂」と定義しつつも、無住はそういった心身の安樂に止住することなく、「ただこの世に心安きのみにあらず(後略)」と述べるが如く、来世のためにも修行の道に入ることを積極的に勧める。言わば無住は、「心身の安樂」という状態を、「仏法修行の志」を起こし「浄土

菩提の淨業」を成ずることの前段階と捉えているのである。

前述した如く、徒然草五十八段全編の主眼は「心は縁に引かれて移る物なれば、閑かならでは、道は行じがたし」という一文にある。修道に相應しい閑静な環境を重視する点で、前引した、沙石集巻九の二十五「先世坊の事」の「身心共に安きを便として、仏法の修行も思ひ染むべし」や、巻十本の四「俗士、遁世したりし事」の「身も暇なく、心も隙なければ、仏法修行の志も立ち難くして、浄土菩提の淨業も成しがたし」という記事ともよく合致する。「人身を受けながら、道行を修せずは、禽獸に何ぞ異ならん」という竜樹の戒め、及び「人の禄を受けぬれば、人の事を憂ふ、生死纏繋を断たんと思ふいそぎあり。何の暇ありてか、君に仕へん」という勝軍禪師の詞と五十八段の記事内容との近似性はすでに指摘された事柄であるが、巻九の二十五（梵釋本巻七の二十五）には当該両文が同時に引用されていることに留意されたい。当該両文の同時引用は『雑談集』巻三「愚老述懐」にも見出され、仏教を宣揚することにあたって無住がよく援用する文言のようであるが、徒然草五十八段の趣旨と沙石集巻九の二十五の叙事内容とがよく一致すること、徒然草と沙石集とは様々なところに深い関わりが指摘されてきたところから考えて、徒然草五十八段において当該両文の同時引用はただの偶然ではないようにも思われる。

## 終わりに

諸縁の放下、それによってもたらされた「生活の閑寂」「心身の安静」への重視、そして、身と心の安定を得ての閑居を人生の安楽とすることなど、無住と兼好の思想上の一致点は少なくない。しかしながら、その一方で、無住は「心身の安楽境」に安住せず、それをあくまで仏道修行に至る前段階として捉え、往生の本願のために仏道精進を勧奨するところに主眼を置く。ここに、無住の思想と兼好の道念との相違が存する。徒然草二百四十一段は無常の自覚による所願の放下と仏道の精進を勧める章段で、徒然草全編の末尾近くに位置し、兼好の様々な思想の要諦を総括した章段として重要視されているが、「直に万事を放下して道に向かふ時、障りなく、所作なくて、心身永く閑也」という末尾の一文に示される如く、兼好は身心の閑静を仏道に向かう最終的目標として捉えているのである。安良岡康作氏はそういった兼好の思考を「所願の放下」「仏道の精進」「心身の閑静」という三段階に分けて把握し、第三段階の「心身の閑静」を指す所に兼好の独自の生き方が存し、徒然草全編の帰着点・統一点が見出されると指摘されている（注二十七）。「愚俗」に仏道の要諦を示し、仏道への精進を勧めるという明確な目的を持つ沙石集と違って、徒然草における兼好は、「世俗」と「仏道」との二つの次元の間に「安静境・閑暇境」という第三の境地を見出して、それを自己の拠り所としているのである。

「心身の安浄境」をめぐる、沙石集と徒然草の態度には次元の相違がはっきりと見られるが、筆者としてはとくに、「諸縁の放下」「心身の安浄」を唱える際に、ともに「摩訶止観」に関連付ける無住と兼好との筆法の類似に留意したい。徒然草七十五段末尾の「生活、人事、伎能、学問等の諸縁をやめよ」とこそ、摩訶止観にも待めれ」という一文との類似が指摘されている巻六の七「説経師の盜賊に値へる事」の記事は、「止観」の説法を援用しつつ、名利の念と煩惱から離れて学問をも含む世間の縁務をすべてやめ、心を安らかにして安楽な生活を送るべしと説いており、その趣旨においても徒然草七十五段とよく一致する。また、兼好が求める「心身の安浄境」に近似する記事として掲げた、沙石集巻四の七「道に入りては執着を棄つべき事」においても、明禅法印の「止観」談義を記した後に、無住は諸縁に煩わされることなく「身も安く心ものどかなる」を「楽」とするという論説を展開するのであるが、心身の安楽の価値を説くに際して、「止観」の記事を引用して論旨を強め、一段を締め括る徒然草七十五段との構成上の相似が注意されるのである。

以上の如き考察を念頭に置くならば、七十五段結尾の「止観」引用について、「兼好が『沙石集』を読んだか否かは断定しがたいが、あるいは当該の箇所等が兼好をして『止観』に関心を持たせるに至ったのかもしれない」（注二十八）とする安良岡氏の推測は、少なからぬ蓋然性を有しているように思われる。「生活の

閑暇」「心身の安浄」を重視するという価値観を共有するのみならず、「止観」を援用して「諸縁放下」「心身安楽」を提唱するという点に至るまで、沙石集と徒然草との間には少なからぬ共通点を見出し得るのである。兼好は沙石集を媒介として「摩訶止観」の文言に着目し、徒然草七十五段中にそれを引用したのではないかと思量されるのである。

（注一）小島孝之「法語と説話」（『説話とその周縁 物語・芸能』説話の講座 第六巻 勉誠社 平成五年）。

（注二）「先年沙石集、病中ニヲカシゲニ書散シテ、不<sub>レ</sub>及<sub>ニ</sub>、再<sub>レ</sub>拾<sub>ニ</sub>シテ、世間ニ披露、讀敗相半歟」（『雜誌集』中世の文学 三 弥井書店 一九七六年）。「不意ニ草案ノマ、ニ洛陽披露。閑頭ニツケテ其價多シ」（流布本沙石集巻第二）、「此物語先年草案シテ未及清書之處。不慮ニ都鄙披露」（流布本沙石集巻第四）。流布本沙石集の引用は「慶長十年古活字本沙石集総索引一影引篇」（勉誠社 昭和五十五年）に拠った。

（注三）流布本沙石集の各巻末に見出される識語や書入などを参照（『慶長十年古活字本沙石集総索引一影引篇』）。

（注四）黒田亮「無住と兼好」（『文学』第七巻第六号 昭和十四年六月）。

（注五）三木紀人「隠遁文人の世界 徒然草」（『日本文学講座七』一九八九年 大修館）。

（注六）西尾光一「中世説話文学論」（『瑠璃房 昭和三十八年』）。

（注七）安良岡康作「徒然草全注釈」（『日本古典評釈全注釈叢書



川書店 昭和四十三年。福田秀二「徒然草第四十九段の冒頭」(『中世文学論考』明治書院 昭和五十年)。以下の福田説は同書に拠る。

(注八) 荒木見悟「解題」『蹠元直指集』(一元宗本境、和刻影印近世漢籍叢刊思想四編：一三 荒木見悟・岡田武同主編 中文出版社 一九七二年)。なお、新版『禅学大辞典』(大修館書店 二〇〇三年)では「蹠元直指集。四卷。明、天衣宗本著。嘉靖三年自序刊」とある。

(注九) 吉岡義豊「銷釈金剛科儀の成立について―初期宝巻の一研究」『寛谷史壇』五六・五七号、昭和四十一年十二月。「道教の研究」所収(吉岡義豊著作集第一巻 五月書房 平成元年六月)。

(注十) 澤田瑞穂著「寶巻の研究」国書刊行会 一九七五年六月。

(注十一) 吉岡義豊「銷釈金剛科儀の成立について―初期宝巻の一研究」。

(注十二) 鄭志明「銷釋金剛科儀義理初探」『中國佛教』第二九卷第五期(一九八五年五月)二八三頁。臺北市、中國佛教社。  
(注十三) 前川亨「禅宗史の終焉と宝巻の生成―『銷釈金剛科儀』と『香山宝巻』を中心に」『東洋文化』(特集 中国の禅)八三(号)二〇〇三年三月、東京大学東洋文化研究所。

(注十四) 「銷釋金剛經科儀」の本文は、(姚秦釋)鳩摩羅什譯(宋釋)宗鏡述(明釋)覺蓮重集「銷釋金剛科儀會要註解」(『已新纂大日本續藏經 第二十四冊』(般若部類) No.467、東京：國書刊行會 一九七五―一九八九年)に拠る。

(注十五) 四明石芝沙門宗曉編「樂邦遺稿」の本文は「大正新脩大藏經 第四十七冊」(淨土宗類) No.1968B(東京：大

藏經刊行會。一九二四―三五年)に拠る。なお、『望月仏教大辭典』(望月信亨著、塚本善隆編集代表 世界聖典刊行協會、一九六六年)によると、『樂邦遺稿』は二巻、南宋寧宗嘉泰四年(一二〇四)の編に係り、『樂邦文類』の続編となるものであるが、日本に早く伝えられ、長西(一一八四―一二二八)の淨土依憑經論章疏目錄には「樂邦文類」とともに目を出せりという。

(注十六) 「林泉老人評唱丹霞淨師頌古處堂集」の本文は「已新纂大日本續藏經 第六十七冊」(禪宗類)〔諸宗著述部〕No.1894に拠る。なお、丹霞淳(一〇六六―一一一九)は北宋曹洞宗の僧、林泉從倫は元の高僧、萬松行秀(一二六六―一二四六)の法嗣である。引用文は林泉老人の評唱にあたるものと思われる。

(注十七) 元師子林天如則著「淨土或問」の本文は「大正新脩大藏經 第四十七冊」(淨土宗類)〔諸宗部〕No.1972に拠る。なお、天如惟則(一二八六―一三五四)は元の臨濟宗の禪師、兼ねて淨土の教を弘む。

(注十八) 管見の限りでは、『淨土資糧全集』(『已新纂續藏經 第六十一冊 No.1162』、『淨土十要』(同書第六十一冊 No.1163)、『淨土晨鐘』(同書第六十二冊 No.1172)、『西歸直指』(同書第六十二冊 No.1173)、『淨土全書』(同書第六十二冊 No.1176)、『徑中徑又徑』(同書第六十二冊 No.1185)、『清珠集』(同書第六十二冊 No.1192)、『慈悲道場水懺法隨聞錄』(同書第七十四冊 No.1495)、『淨土聖賢錄』(同書第七十八冊 No.1549)、『宗統編年』同書第八十六冊 No.1600)などがある。

(注十九) 注十五に参照。

(注二十) 拙稿「無住と兼好」(『台大日本語研究』第十一期 二〇

〇六年)を参照。

(注一二) 田辺爵『徒然草諸注集成』(右文書院 昭和三十七年)。

(注一二) 『方丈記・徒然草』(新日本古典文学大系) 第五十八段の脚注に拠る。

(注二三) 稲田利徳『徒然草』(古典名作リーディング4 貴重本刊行会、二〇〇一年)。

(注二四) 安良岡康作『徒然草全注釈』。

(注二五) 新編古典文学全集『沙石集』二〇三、二〇四頁。

(注二六) 『菩提為真樂』、『大方廣佛華嚴經疏』卷第五十六(唐清凉山大華嚴寺沙門澄觀撰)、『大正新修大藏經』第二十五冊、經疏

部三大藏經刊行會編 一九八三年)に拠る。

(注二七) 安良岡康作『徒然草全注釈』。

(注二八) 安良岡康作『徒然草全注釈』。

\*徒然草の本文は、正徹本を底本とした『方丈記 徒然草』(新日本古典文学大系 岩波書店 平成元年)に拠った。沙石集の本文は市立米沢図書館蔵本を底本とした『沙石集』(新編日本古典文学全集 二〇〇一年 小学館)、梵舜本沙石集はお茶の水圖書館蔵成賢堂文庫梵舜本を底本とした『沙石集』(日本古典文学大系 一九六六年 岩波書店)、元応本沙石集は巻末に元応三年書写という奥書付の写本を影印した『元応本沙石集』(汲古書院 昭和五十五年)、内閣本沙石集は土屋有里子編著『内閣文庫蔵『沙石集』翻刻と研究』(笠間書院 二〇〇三年)、流布本・古活字本沙石集は深井一郎編『慶長十年古活字本沙石集総索引―影引

篇』(勉誠社 一九八〇年)に拠った。なお、引用本文中に付した傍線は、本論文の筆者が私に付したものである。

\*本論文で引用した徒然草古注釈書は以下の通りである。秦宗巴『徒然草寿命院抄』(吉澤貞人『徒然草古注釈集成』勉誠社 平成八年)。林道春『徒然草楚植』(『徒然草古注釈集成』)。「拾遺抄」(浅香山井『徒然草諸抄大成』(同志社大学図書館蔵、貞享五年五月刊の板本)。

(そう けいけい 台湾大学日本語文学系助理教授)

#### 研究室受贈圖書雑誌目録Ⅳ

甲南大学紀要 文学編(甲南大学文学部) 一六一

高知大國文(高知大学国語国文学会) 四一

語学と文学(群馬大学語文学会) 四七

国語学研究(東北大学大学院文学研究科「国語学研究」刊行会) 五〇

国語国文学(福井大学言語文化学会) 五十

国語国文学会誌(新潟大学人文学部国語国文学) 五三

国語國文學報(愛知教育大学国語国文学研究室) 六九

国語国文学誌(広島女学院大学日本文学会) 四十

国語国文学研究(熊本大学文学部国語国文学会) 四六

国語國文研究(北海道大学国語国文学会) 一三九、一四〇